

福岡大学医学会ニュース

われらが医学部・病院 平成時代の幕開け

医学部長 三好 萬佐行



平成時代最初の正月を迎え、さらに新しい節氣に入り、先生方を始めメディカル・ゾーンのあらゆる職員の方々および学生諸君には新鮮な活気に満ちたおられることと拝し、御祝申し上げま

大学医学部は新設ではありません。生まれた時からある医学部なのです。明瞭な世代の交代です。卒業生も千五百名近くとなりました。卒業後の大学院あるいは卒後研修での医学研究や実際の診療の領域で重要な役割を果たし、また、高い地位を占めておられる方々もおられます。同窓会、会員各位の御好意により、昨年は福岡大学の名を冠した初めての国際医学シンポジウムを開催することができました。その成果は昨秋、英文で発刊されました。そのためには私学財団の研究助成、また個人的な御支援もありました。ここに深く感謝申し上げます。

私共の福岡大学医学部が発足して以来十八年を経ましたから、今春には医学部発足の年に生まれた学生も入学して来ます。彼等にとっては福岡

足下を固めながら前へ

医学研究科長 古川 達雄



医師として重要なことは、医道・医学・医療をきわめることといわれています。医道は医師としては最も基本的なこと、人間としてのかかわり合いを通して、医療グループのリーダーとしての役割を果たし、また患者の人間としての痛みや辛さを理解しながら医療を進めなければなりません。昔は医者・役者・芸者は最もスボイルされた人達ともされました。周囲の人達からチャホヤされているのであ

医学教育の面におきましても、ユニークな入試として導入したMCAT（適性試験）も軌道に乗り、その成果も出て、それによる有能な人材の入学が期待されるようになり、また、医学教育の成果を見る最低のバロメーターである医師国家試験も、その内容が大きく変わったとは言え、学生諸君の学習に加えて先生方の日々の御指導があつて、好成績が得られると確信しております。

このように医学部・病院の実績が積み、その歴史が来つたところですが、医学部および病院は社会全般から、福岡大学自体の内部におきましても新たな転換の局面に立っています。

ある救命救急センターは福岡市という地域の中で、全般的医療をカバーできる人材をもっている。私共の病院においてこそ、その設立は最も適切なことと判断されます。救命救急センターの活動のために、ICUや手術室などの拡充が必要であり、当病院の病床をフル回転させるためには予備の病床も置かねばなりません。また、一般外来を拡充し、地域医療に奉仕せねばなりません。

二、地域の医療ニーズに対応した専門診療センターを作り、診療の有機化を図ろう。専門化した診療を総合して行うために、現在の診療体制を組み合わせ、行おうとしている。糖尿病センター、周産期センターなどがこれです。また、現在の診療科の中でも行っています。さらに専門的医療ニーズに必ず、形成外科などの創設が期待されています。

三、看護婦や診療放射線技師を四年制大学レベルで養成しよう。文字通り、高度医療に対応できるコ・メディカル要員の育成を目指すものです。

四、医学教育全般にわたって二十一世紀に向けた先進的医学教育を目指す。

五、筑紫地区における医療のセンターとなるようにしよう。現在の筑紫病院は同地区に加え、朝倉・甘木地方からの道筋にあり、病院施設や敷地の拡充・拡大が必須なのです。

六、教育・診療での人事の活性化のために制度や慣行を改善しよう。現行の診療・教育単位を多極化・細分化したり、統廃合を考えよう。また、定年制の実質の見直しをしよう。

先に申し述べましたメディカル・ゾーンの健全で将来に

発展できる運営のためには、これらのこととお題目にしてはならないと思っています。しかし、どの一つの実現にも医学部・病院の関係者全員の協力が必須です。皆様方の誠意を願っております。

科などの創設が期待されています。これらのこととお題目にしてはならないと思っています。しかし、どの一つの実現にも医学部・病院の関係者全員の協力が必須です。皆様方の誠意を願っております。

第十六回 医学部慰霊祭



第十六回福岡大学医学部解剖慰霊祭は、御遺族ならびに御来賓の方々、それに、本学教職員や学生など約五百名が参加し、平成元年十月二十八日午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われた。今回祀られた霊位は、学生の医学教育のための系統解剖に献体された三十九体、病院で死去されて病因究明のため

に病理解剖を承知頂いた百一十体、また、司法解剖をお受け頂いた三十八体、合せて百七十八体であった。

医学の発展は治療の進歩、人類の福祉を究極の目的としており、そのためには人体の構造や機能を冷静に見つめなければならぬ。三好医学部長は祭詞の中で、「近年、医学

福岡大学大学院医学研究科

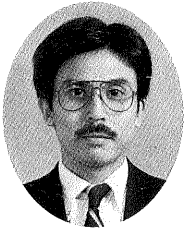
年 度	大 学 院 在 籍 者	学 位 取 得 者	
		課程修了者	論文提出者
昭和53年	4		
54	11		
55	28		
56	54	3	
57	72	7	19
58	82	11	18
59	87	24	12
60	78	21	13
61	72	16	13
62	77	16	16
63	86	16	15
平成元年	88		

自己紹介

平成元年五月以降に昇格又は赴任

産婦人科講師

吉満 陽孝



昭和二十九年熊本大学附属病院において出生。北九州市で育ち、小倉高校を経て昭和五十四年鳥取大学医学部を卒業しました。卒業後は父が開業している関係もあり、九大婦人科学産科学教室（主任・滝一郎教授、現在中野仁雄教授）に入局しました。その後国立中津病院、社会保険佐賀病院、福岡通信病院などへの出張を含め、十年間九大での産婦人科医としての臨床経験を積んだ後、今年四月に福岡大学へ参りました。

眼科講師

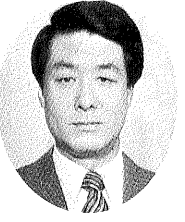
清澤 崇晃



昭和五十六年に福岡大学眼科学教室に入局し、初めて眼科は大変な忙しさと驚きのまじりつと居続けています。それというも、学生の頃、まさか眼科医になるとは考えたこともなかったもので、眼科の講義に出席した覚えは全くないです。

放射線科講師

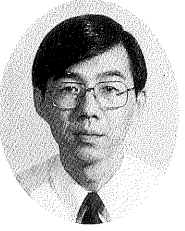
坂田 博道



昭和二十三年福岡県八女市生まれ。久留米大学附設高校を経て、昭和四十九年鹿児島大学医学部を卒業しました。卒業後研修医を経て鹿児島大学放射線科（篠原治教授）に入局し、主として核医学検査に従事し、塩化タリウム、甲状腺腫瘍、肺がん、縦隔腫瘍への応用、肝臓シンチグラフィ、³¹Lipiodol による肝臓腫瘍の診断、¹³¹I-MIBG による褐色細胞腫、神経芽細胞腫の診断などを研究してきました。学位は昭和五十九年「原発性肺がんのシンチグラフィに関する臨床的研究」で取得しました。この間大分県立病院、鹿児島県立鹿屋病院に三年間出向し、核医学のほか消化管X線診断、内視鏡、呼吸器疾患、CTなどを勉強できたことが今日非常に役に立っています。

臨床検査部講師

井手口 裕



パルハティ氏は、一九八五年十月より政府交換留学生として、中国の新疆ウイグル自治区より福岡大学（生理学第一、薬理学）に留学し、研究を続けていたが、古川達雄主任教授（薬理学）の指導のもとに「陳皮ならびにその主成分 synephrine の氣道における抗 leukotriene 作用ならびに胃粘膜保護作用」(福大医紀16巻4号)の研究をまとめ、学位申請論文として福岡大学医学部の教授会に提出された。今年、同教授会論文審査会をパスし、平成元年十一月十三日付けで、福岡大学より医学博士の学位を授与された。これは福岡大学が外国人研究者に授ける博士号の第一号に当たる。

福大外国人研究員の学位第一号

帕爾哈提 阿都都 (中国新疆ウイグル自治区)



教室紹介

福岡大学病理学第一

一九七三年四月、開設以来、今年で十六年が経過し、来、今年で十六年が経過し、教室スタッフも、菊池教授、岩崎教授、村山助教、岩下助教（筑紫病院）、以下、助手二名、医員二名、大学院生十七名、研究生一名の大部帯になっています。また大学院生も一外科、二外科、産婦人科、皮膚科、脳外科と各科に出身が渡っています。日常業務としては、病理解剖、病理組織診断、学生教育があります。特に組織診断は、年間三万件を越す程、莫大な量になっていま

す。これらの日常業務を行ないつつ、スタッフの充実とともに、研究のほうも充実してきています。菊池教授を中心として悪性リンパ腫、白血病などの造血器疾患、また岩崎教授を中心として軟部腫瘍、村山助教、岩下助教を中心とした消化器疾患、また各科からの大学院生の増加に伴い、神経系、生殖器系、呼吸器系と研究分野も広がってきています。研究内容としても、科学の進歩とともに、多岐に渡るようになってきていま

床検査部本来の業務とは別に、興味ある症例については、臨床各科の協力を得られる限り、積極的に病態解明に取り組みたいと考えています。

海外便り

「ケンブリッジにて」

黒岩 中

昨年の十月半ばに昭和六十三年度長期在外研究員として、ケンブリッジにやって来ましたが、図らずも後半近く居ることになりました。最初分かんかった街や大学の様子も大部つかめましたので、少しここに紹介したいと思います。尤も、ケンブリッジはオックスフォードと並んで、大都会として英国では固より、世界中に有名であり、我々でもこの大学の紹介がテレビで放映されたように記憶しておりますので、皆様の中には既に随分詳しく御存知の方が居られるかもしれません。悪しからず。

ケンブリッジは、ロンドンの北約百kmに位置する、人口十万人位の大学以外にはこれと言った産業のない、文学と文藝の文藝都市です。いつも対比されるオックスフォードが、周辺に自動車工場などを有して、産業都市の性格も兼ねた大都市であるのに対して、多少田舎くさい感じはしますが、生活環境は大変良く、イギリス人もここは生活しやすい場所、住みたい街の五本の指に入っていると言います。街の西側を北東に向ってCAM川が流れ、それに沿ってカレッジ群や大学の施設が立ち並び、それらの間に民間の商業地、又周辺部に住宅地と言った塩梅の街の様です。尚、商業地の大部分の土地は大学（というよりカレッジ）の所有で、従って、ケンブリッジ大学は、英王室、国教会に続く三番目の大資産家と云っても可い、この街における大学の位置が自ずから分るというものです。二十数カ所あるカレッジは、十三世紀に建てられたものを始め、多くは十五

「フランクフルトのAIDSの現状について」

竹下 盛重

西独のほぼ中央にあるフランクフルト市はサハリンの中央部と同緯度に位置しますが、昨年、本年とも異常気象のためか耐えられない様な寒さではあります。人口六十万の中都市で、欧州では金融、国際空港、メッセの町として有名です。一九九二年の欧州経済統合に向け各国の駆け引きが行われていますが、日本もその中に参画し拠点として居る町の一つです。町は緑が多く、私達の住い周辺にも平和台レベルののから小さいものまで数多くあります。私が通っていますフランクフルト大学医学部、病院は町南側の水量豊富なマイン河沿にあり、本病院はAIDSのセンターでもあ

「ケンブリッジにて」

「ケンブリッジにて」

「ケンブリッジにて」

(二頁より続く)

り、専用病棟では数人のエイズ患者が廊下でベンチに倒れ、吸入療法を行なっています。入院患者は症状改善すれば町にもどります。一九八三年に病理解剖が初めて行われて以来、一九八五年二十二例、一九八八年四十五例と加速的に増えています。患者は二十、四十才の男性に多く、死因はカリニ肺炎が大多数で、ATLLと同様の現象です。時にトキソプラズマ症、たまにリュウシマニア症等が見られ、まさに nude human と言っているかと思えます。これらエイズ患者に対する病院側の対応は、まず全患者の血清アストを行ないます。一九八四年に看護婦が注射針から感染した報告もあり、慎重です。生検は出来る限りしない、再利用する物は、ホルマリン、アルコール、オートクレーブで消毒する程度です。直接的な損傷、粘膜接触がなければ、大丈夫と考えていいかと思えます。しかし病院関係者にとつて安全でも、患者は媒介者としていろんな所に出没し感染者を増します。また潜伏期が十数年と非常に長い陰性患者も大きな問題です。ホモセクシャルは開放的で、時にだき合う姿を見る

ことがあります。ホモにも二種類あり、夫婦の様な一夫一婦制と一夫多妻制があり、後者の危険率が圧倒します。薬物常用者もホモとからみ大きな要素です。市は薬物常用者が使う針による感染防止のため彼らに新しい針を提供するという親切な行いがあります。一方、患者でない陽性の人も大きな精神的苦痛を被ります。ある女性は病院に対し裁判をおこし、血清試験の再評価がなされていません。こういふ私にも、危機が迫っています。時に町道場で柔道をしますが、柔道着に血液が付いていることがあり、手に傷がある時など薄気味悪い感じがします。また子供と公園で遊ぶ時に、針が落ちていないか気を付けることもあります。日本では興味本意で扱われる感がありますが、アメリカを筆頭に欧州主要都市は今エイズに冒された人々から、婦人などもより、十才台の若者への感染が大問題になっています。

「デトロイトより」

柴田 和彦

昨年四月より海外研修が許可され、アメリカミシガン州デトロイトにある Sinai Hospital の Research 部門の Dr. Bannion のもとで、中核ドメイン及び神経ペプチドに関する分子遺伝学的研究をさせてもらっています。この Research Center はできてまだ四年足らずの新しい施設で、staff のほとんどがエール大学から移ってこられているようです。Dr. Bannion も薬理学的 assistant professor を務めた後、この Center に来ています。section のスペースは、かなり狭く、小さな四階建ての Research building の二フロアを占めていて、私の所属する Laboratory of Molecular Neurobiology も実験室は一つだけです。しかし、実験器具が狭い空間に非常にうまく配置されていることや、他の labo との共同研究が多いことなどから、実験をするにあたっての問題はまったくありません。病院の周辺はデトロイトらしい荒れた町並みが続いており、出歩く気にはなりません。

現在のこの研究所の最も大きな project は、薬物中毒が大きな問題となっている中で、その代表的薬物であるコカインの作用機序に関するものを買っています。このように大学の研修が終わり外の病院へ出張してもうななく技術と学問が修得できるようなシステムにされておられ、医局員の増加と共に関連病院長も充実してきています。整形外科の需要と共に、今後ますます発展していく科目であると考えています。また、女性でも、手の外科部門、形成外科部門、リハビリ部門、リウマチ部門など、あまり体力の必要とされない要素も大きく、これから、どんな女性の進出が考えられる時代に違いないように思っています。

(文責・黒田)

教室紹介

福岡大学整形外科

一般に、整形外科といっても本来どこを扱う科がよく知らない人がたくさんいます。定義的には、全身の骨、関節、筋肉、神経、運動・支持器官の疾病を扱う科と考えて下さい。このように運動に非常に関与している、現在流行のスポーツ医・科学の中心的存在となつています。我々の教室の高岸教授以下、竹下助教授も非常にスポーツ医学に興味を持たれ、体育学部と

の共同研究として、九州一周駅伝や金鷲旗・玉竜旗、西医体などへの協力を幅広く行っています。スポーツ以外にも教室のスタッフは充実してきており、各セクションのチーフは、それなりのスタイルを出しつつあります。それには週三回の術前・術後、新患の症例カンファレンスが非常に役に立っており、二カ月一回の教室カンファレンスで、外の先生との勉強会も一役



来訪

平成元年5月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者はつぎのとおり。①所属 ②目的 ③来訪日 ④訪問先

- Susjanti Widjaja ①インドネシア海軍病院 ②超音波医学の研究 ③1989. 10. 9~10. 27. ④内科学第一教室
- Dr. Bing-Wen Liu ①Professor, Dept. of Biochemistry West China University of Medical Sciences Chengdu, China ②第21回動脈硬化学会出席及び「福岡—成都スタディ」の今後のうちあわせ ③1989. 6. 1~6. 10. ④内科学第二教室
- Rakesh. K. Tandon ①全インド医学研究所 消化器科 準教授 ②胆石溶解分野における新しい直接胆石溶解剤及びその溶解方法の研究のため ③1989. 5. 28~6. 19. ④外科学第一教室
- Moon Kwan Chung ①YeungNam University Hospital 内科 助教授 ②上記に同じ ③1989. 6. 11~6. 17. ④外科学第一教室
- Howard D. Dorfman M. D. ①Professor of Orthopaedic Surgery, Pathology and Radiology, Albert Einstein College of Medicine, Head, Section of Orthopaedic Pathology, Department of Orthopaedic Surgery Montefiore Medical Center ②第22回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会招待講演「Slide Seminar on Bone Tumors」 ③1989. 7. 21. ④整形外科教室
- Frederick R. Eilber M. D. ①Professor of Surgery, Division of Oncology, UCLA School of Medicine ②第22回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会招待講演「Primary Malignant Bone Tumors of the Shoulder Region」 ③1989. 7. 22. ④整形外科教室
- William Epstein, 服山公江 ①カリフォルニア

- 大学サンフランシスコ分校皮膚科教授 ②講演「AIDSについて」 ③1989. 9. 27. ④皮膚科学教室
- Dr. Ph. Sourdil ①Clinique Sourdil, France ②硝子体手術の適応と術式について講演 ③1989. 5. 26. ④眼科学教室
- Dr Manish Narain ①インド ②福大における眼科手術、外来・病棟診療を見学 ③1989. 8. 1~8. 5. ④眼科学教室
- Joo Ho Sung ①ミネソタ大学(米国) 神経学・神経病理学 教授 ②Microglia and Macrophage response in ischemic brain injury. のタイトルで総合研究所主催研究会にて講演 ③1989. 7. 17. ④解剖学第二教室
- Marvin L. Sears 教授 ①Yale 大学医学部眼科学教室 主任教授 ②解剖学山田英智教授との共同研究 ③1989. 4. 16~6. 9. ④解剖学第二教室 中華人民共和国 河北医学院 学長以下4名 ②解剖学山田英智教授を表敬訪問 ③1989. 6. 9. ④解剖学第二教室
- K. A. Shakoar ①パキスタン国立小児病院 病理部助教授 ②講演「Malignant tumor of childhood in Pakistan」 ③1989. 6. 27~6. 29. ④病理学第一教室
- Kouichi Maeda ①ヘンリーフォード病院血液部部長 ②講演「Myelodysplastic syndrome」 ③1989. 6. 27. ④病理学第一教室
- Jean-Luc POPOT ①France Instit de Biologie Physico-Chimique 教授 ②日仏 Human Frontier Research プログラムで視察の折、微生物学永山教授を表敬訪問 ③1989. 5. 29. ④微生物学教室
- 丁育基 (Ding Yu-ji) ①北京 首都医学院 宣武医院 脳神経外科 主任教授 ②共同研究(日本と中国における脳血管病変の放射線学的・臨床的分析)についての協議。講演(1989年10月16日)「Functional improvements by auto-adrenal medulla-caudate implantation for treatment of Parkinson's disease」 ③1989. 9. 23~10. 21. ④筑紫病院 脳神経外科

リサーチビジターからの声の欄

Halloo! my college

Tibor Toth, M. D.

(福岡大学医学部病理学第2)

Please allow me to introduce myself. My name is Tibor Toth and I am a 37 year-old Hungarian. I am a director of the Department of Pathology in a County Hospital in Vespem, which is in the west region of Hungary. Why am I in Japan? This is an old story. In my native-town, there is a famous museum, which has got a lot of valuable Japanese art-collections. It was collected by my compatriot who lived in Japan in the last century. When I was young—if I had time—I went to the museum to observe this exhibition. At that time I decided I would go to Japan in my lifetime.

What does this term mean: Japan for Europeans? Famous traditions, Fujiyama, Shinto Shrines, Buddhist Temples, Tea-ceremony, Samurais, Geishas, Hiroshima and Nagasaki, Sakura, Bunraku and Kabuki, shocking statistical data, highly developed electronics, mountains and seas.

My life is combined with things Japanese. Abe Kobo and Kurosawa are my favourite film directors. In my department, there are Japanese microscopes. At my home my library contains some anthologies by famous Japanese poets and Japanese water-painting collections.

How did I realize my childhood's dream? My research theme is a renal pathology. Professor Takebayashi is one of the most famous doctors in this scientific field. I asked him to engage me as a member of researchers in his department. Last year I was fortunately invited by him to his institute in Fukuoka University. I started a long trip with my family to Japan on July 31. During this trip, we were somewhat anxious, but at the same time we felt happy. On August 4th, I caught the first sight of Japan island from the ship on the Japan sea. I think it was one of the most important moments in my life, as well as my family.

At last my childhood's dream has been realized. I will never forget the deep emotion when I met the persons at my new institute in Fukuoka University and Doctor Takeda and Mrs. Takeda at Hakata station. Since August 9th, I have been working at the 2nd Department of Pathology. My new theme in the institute is very interesting for me: morphometric examination of membranous glomerulonephritis using electron microscopy. The circumstances for my study in the University is very excellent (these are important for my study); there are numerous books and journals, electron microscopies, and lots of renal materials. I hope the results of my research work will be good. My colleagues are good consulting partners, excellent pathologists, and they are very kind and helpful to me.

I and my family have a good impression on Fukuoka, which is a fascinating city. This city has old and modern sights of town, where I really like walking around. I admire famous Japanese gardens, curious Japanese flowers and trees, which we have never seen in Hungary. The first festival that we saw in Japan was Hojoya, a colourful old festival in Hakata. We danced in Bon-odori in Momochi with our friends. One of the famous and dynamic festivals was Karatsu-Kunchi, which made a strong impression on me. I feel that keeping old traditions is one of the most important things in the life of any country.

We have many Japanese friends, who teach us how to live in Japan. We are interested in the Japanese traditions, education system, the Japanese life style, the Japanese arts and the Japanese foods. At first, the Japanese foods were strange for us, but now, we like all of them; crabs, miso-soup, tofu and so on.

We are enjoying ourselves very much in Japan. I hope we will receive many, many new impressions, and want to get new knowledge and information about Japan.

Please accept my country's greeting.

福岡大学医学会総会・例会の報告

例会の報告

日時 平成元年7月19日(水)
午後4時半より
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

第12回総会

議事

1. 報告事項
2. 役員改選
3. 昭和63年度会計報告ならびに平成元年度予算(案)
4. その他

第21回例会

座長

菊池 昌弘 教授

1、組織球性腫瘍の病理学第一 岩崎 宏 教授

2、耳石器平衡能 耳鼻咽喉科学 重昭 教授

「親心・子心 (2)」

研修医の遠吠え

内科第一研修医 内田 俊毅



指示や依頼等だけでなく、シス
テム化、オンライン化出来れ
ば、同じ hard work でも
その医療内容をさらに発展
充実させることが出来るの
ではないかと思うのです。

研修医としての生活を始め
て、一年半とうとういま
す。入局した頃は、学生時代
の、のんびりとした毎日とは
一線を画し、引越し荷物のひ
もを解く暇さえない hard
work にいきなり身を置く
ことになり、途惑いと不安を
覚えたものでした。そんな日
々の中で、新しい知識が、体
験しながら一つ一つ確実に飛
び込んでくることに、今まで
の机上の学問とはまったく違
う充実感と期待に胸躍ったの
も事実です。そうした忙しき
に、大分なれてきたのでし
ょうが、ふと、自分の現状に
ついて気がついたことがあります。
まず一つに、自分は、患者
さんと十分に communi-
cation を取っているのだろ
うか。そしてもう一つ、深く
きいて、何かを勉強してい
るかどうかという二点です。

伝票や書類書き、検査の準備
data の整理に追われ、患者
さんを 7、8 名受け持ってい
る時などは、十分な com-
munication を取ることは
時間的に難しかったように思
います。検査結果しか見ない
で、患者さん自身内面を含め
た、その患者さんの back
ground を無視した治療を
開始してしまう、そんな恐
ろしい状況が、知らず知らずの
うちに起っていたような気が
します。問診やその他、ちょ
っとした事務的な事について
は、病状を知る上で十分な時
間をかける必要があると思
いますが、もし、煩雑な検査の

「感動した患者紹介状」

泌尿器科 有吉 朝美

つい先日、下記のような紹
介状をいただいた。インタ
ー時代を含めると私の医学生
活は 30 年になるが、これまで
に最も感動した紹介状であ
る。ぜひ、研修医や学生諸君
に読んでいただきたいと思っ
て、全文を披露する。この
紹介状と患者との間の素晴ら
しい人間関係が医療の原点で
ある。誤解を防ぐため、私
ち福大泌尿器科に対する賛辞
は抜きにして、お読みいた
だきたい。

御高診願

福岡大学泌尿器科
A. A. 先生および主治医先
生御机下

お忙しいところ大変お世話
になります。T. I. 氏 (44 歳
男) をご紹介申し上げます。

●1. 左腎腫瘍、●2. 高
血圧、●3. 狭心症の疑い、
●4. 多発性肝臓腫瘍

K 市在住の会社員です。こ
れまで、●2、●3 で、不規
則ながら当院で治療をして
おりました。今回、●3 の評
価目的で入院しましたが、腹
部超音波検査で、左腎下極に
腫瘍性病変 (8×6 cm) を認
めました。CT 検査も他院に
依頼、施行しましたが、やは
り腎癌が強く疑われますの
で、先生に御高診願いただき
診察させていただきます。

研修医や学生として、全く指
摘された通りだと思い、多く
の反省点や心得を忘れてはな
らないと思っています。確か
に、要領よく生きることにた
けた人が近頃は増えたように
思います。私もそんな生き方
では、真理を掴み、見出す
ことはできないと思います。
色々と愚見をならべてきま
したが、私の意見を福大病院
の研修医の遠吠えとして、気
楽に受け入れて頂ければ、そ
して、何か少しでも進展があ
れば大変幸いです。

何という、素晴らしい紹介
状だろうか。
手紙は、紹介先の医師と、
入院後に主治医となるであ
る医師への挨拶から始まり、
病室見学の対応が明快・簡
潔に述べられている。何より
私の心を打ったのは、医師
としての良心と、患者に対す
る思いやりが溢れているこ
とである。この O. T. 医師
は、医学知識、同情心、意欲
(これを医療における知・情・
意と言ふ) を完璧に、バラ
ンスよく備えた人である。患
者の性格、気質、家族背景ま
でを熟知し、勘案した上で、
勇気と信念を持って癌の告知
を行い、最善の治療を勧め、
希望を持たせている。しか
も、実際の診療に必要な薬の
処方内容や、レントゲンフ
ィルムなどをそのまま保管し
ておくことまでが追記されて
いる。Informed consent
という言葉が巷に氾濫して
いるが、これほど行き届いたも
のを私はこれまで知らない。
「O. T. 先生は、とても分
かりやすく説明を下され
ました。病気になることは
残念ですが、入院して病室と
闘う決心ができたので、福大
病院にやってきました。よう
しくお願いします。」
患者さんの目にはうっすら
と涙が浮かんでいた。私の目
も、自然と熱くなった。
「こんな素晴らしい先生に、
日頃診て貰っているあなた
は、幸せですね。O. T. 先
生のお考えと、私の判断は全
く同じです。この福大には、
良い医療をしたいというエネ
ルギーが満ち溢れています。
医師や看護婦たちは皆、あな
たの応援団です。あなたが
社会に復帰できるように、一
緒に頑張りましょうね。」
T. I. 氏は、強い決意を顔
に表して頷いた。
皆でスクラム組んで闘おう。
入院後も、引き続き相談し
ていただきますよう、お願い
申し上げます。
追伸・超音波、CT のフィ
ルムは、治療完了まで所有し
て下さって構いません。

教室 便り

学位取得

秀島 輝 (外科学第二)
①米国・ボストン大学でモ
クロナル抗体を用いた選択
的癌化学療法法の確立③89・9
・16・8

木村 謙一 (耳鼻咽喉科学)
福岡大学に提出。平成元年
九月二十日付で医学博士授与
論文名「聴性脳幹反応にお
ける有意差検定脳電図に関
する研究」Study on sig-
nificance probability
mapping of auditory
brainstem responses

受賞

広木 忠行 (内科学第二)
米国脈管学会 (Ameri-
can College of Angi-
ology of Fellow) に選
ばれた。(一九八九年五月)
林 英之 (眼科学)
日本眼科学会 学術振興助
成 眼科臨床の実践研究に
対する助成

研究業績：「血管新生の生
化学的機転とその抑制に関
する研究」
①所属②目的③期間④訪問先
Tibor Toth ④ Pol-
yclinic and hospital of
Veszprem county 病理
部長⑤腎臓病理学研究所のため
③89・8・90・7 ④病理学第
二講座

学术交流

平成元年五月以降の海外留
学または海外から本学への留
学者はつきのとおり。

海外留学

①研修先の目的③期間
笹栗 学 (内科学第二)
①アメリカ、サウスカロライ
ナ医科大学、薬理学教室②カ
リフォルニア・キン系に關す
る研究③89・8・30~90・8・30
福井 敏 (精神医学)
①アメリカ The Men-
ninger Foundation ②病
院精神医学、精神分析学③86
・6・89・7
諸岡 達也 (小兒科学)
①カナダ、トロント小兒病院
②感染症学③89・7・90・6
二四〇円

新刊紹介

△内藤説也 (内科学第二) ①
Immunobiology of
HLA (分担) Bo Dupont
ed.) ② Springer-Ver-
lag ③一九八九・五九・八
〇〇E
△笹栗 学、出石宗仁、池田
正春、荒川規矩男 (内科学
第二) ① Current Ad-
vances in ACE Inhi-
bition (分担) ② Chur-
chill Livingstone ③一
九八九・四〇・a
△広木忠行、川口 浩 (内科
学第二) ①医学医療総論・
心電図・循環機能検査 (分
担) ②医歯薬出版③一九八
九・一〇・二七〇〇E
△松崎元徳、野田慶太、荒川
規矩男 (内科学第二) ①シ
リーズ循環器病への挑戦Ⅵ
高血圧の薬物治療 (分担)
②スウェンセン出版部
③一九八九・六・二八四九
・五〇〇E
△藤野正典、荒川規矩男 (内
科学第二) ①慢性心不全
トラス 慢性心不全をめ
ぐる専門医二四四人の考え方
(分担) ②メディカル・ジ
ヤナル社③一九八九・七
・一五〇四、八〇〇E
△広木忠行 (内科学第二) ①
日経メディックス 心電図
日常臨床篇 (分担) ②日経
BP社③一九八九・七・二
五〇四、九〇〇E
△荒川規矩男、池田正春、中
島与志行、出石宗仁、笹栗
学、木下昭生、古賀 学 (内
科学第二) ①臨床医学の展
望一九八九年版 (分担)
②日本医事新報社③一九八
九・二〇・四七、二〇〇E
△牛島定信、兵動和郎 (精神
医学) ①親と教師のための
思考期学 6、ヒステリ
ー神経症と集団ヒステリー
(分担) ②情報開発研究所
③一九八八・四・七三九、
八〇〇E
△増井玲子、牛島定信 (精神
医学) ①メンタルヘルス実
践大系 5「母親が未熟で
手首自傷の子」(分担) ②日
本図書センター③一九八八
・小田植一 (小兒科学) ①今
日の小兒治療指針 第8版
(増、三河、重田編) ①先
天性喘息 (分担) ②医学
書院③一九八九・九・一五
〇・二、五〇〇E
△満留昭久 (小兒科学) ①今
日の小兒治療指針 第8版
(増、三河、重田編) ①末
梢神経麻痺 (分担) ②医
学書院③一九八九・九・一
五〇・二、五〇〇E
△池田靖洋 (外科学第二) ①
図説内科学診療講座 11
肺炎、胆石症、胆嚢炎、胆
嚢炎 (胆嚢炎とは、臨床検
査と診断) ②メディカル
ビュー社③一九八九・五・二
五〇・一七、五〇〇E
△利谷昭治 (皮膚科学) ①皮
膚科 MOOK No. 16
(薬疹と薬物アレルギー
②金原出版③一九八九
・四・五、九七四E
△林 紀孝 (皮膚科学) ①
TOKYO TANABE
QUARTERLY 特集
「真菌症の基礎と臨床」②
東京田辺製薬③一九八九
・東 義孝、松本廣嗣 (放射
線医学) ①超音波診断への
アプローチ (分担) ②医学
書院③一九八九・四、九四
四E
△東 義孝 (放射線医学) ①
片山 仁編、ベッドサイド
の画像診断 (分担) ②ヒュ
ーマンティワイ③一九八九
・四・一〇、〇〇〇E
△檀健二郎 (麻酔科学 横田
敏勝監訳①非痛性疼痛 (分
担) ②真興貿易医書出版部
③一九八九・六、一八〇〇E
△三好寛佐行 (解剖学第二)
編者①中枢神経解剖学 (第
3版) ②理科社③一九八九
・一〇・一、五〇〇E
△今永一成 (生理学第二) ①
Cell Interactions and
Gap Junctions Vol.
II. ed. Nicholas Spe-
relakis, William C.
Cole. (Sec.1. Chapter
4) ②一九八九・七・四〇〇E
Press③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩
△菊池昌弘 (病理学第二) ①
現代病理学体系 第10巻C
外因論Ⅱ地理病理学分担
②中山書店③一九八九・四
七、五九五E
△岩崎 宏 (病理学第二) ①
軟部腫瘍アトラス (分担) ②
文光堂③一九八九・四、
七二〇E
△坂田則行 (病理学第二) ①
脳血管と心臓血管 (分担) ②
共立出版③一九八九・三、
九五〇E
△松崎昭夫 (筑紫病院、整形
外科) ①整形外科 MOOK
整形外科領域に於ける疼痛
とその処置 (伊丹・西尾編)
肘関節の痛みとその処置
(分担) ②金原出版③一九
八九・五、六六五E
△松崎昭夫 (筑紫病院、整形
外科) ①肩関節の外科 (山
本龍二編、胸部出口症候
群、絞扼性神経障害 (分
担) ②南江堂③一九八九・
一八、〇〇〇E
医学部ニース20号の編集
をようやく終えることがで
きた。多くの人々に原稿をお願
いする関係上、その整理は時
間的に空間的に忙しきや
すい。一例を挙げると「海外便
り」などではすでに掲載され
たものの便りが載ると言うよう
な不手際をいくつかしるこ
とになったが、是非お許しをこ
たい。
今回、編集子も学内役職の
交代で次号からは精神科の牛
島教授にバトンタッチするこ
とになった。短い期間の医学
会ニースの編集であった
が、フォーマルな記事やニ
ースのほかに当医学部に留学
してきた外部 (外国) の人達
の声を「リッジャー」か
ら、また福大卒業生の間でと
にかく先輩・後輩のより上り
に欠けることから、先輩と後
輩あるいは教員と学生の間に
紙面での意見交換として「親
心・子心」の欄を前号からつ
づけてみた。お互いに言いた
いことを発表し合う意見交換
の場として期待したい。
毎度のことながら編集の雑
務は諸君さんに殆どやって
頂いた。最後に当お礼を述
べたい。(竹林)